

「10歳の私へ」

大分県 高橋葵

突然だが君に謝りたいことがある。10年前の約束を守れなかったことだ。私は君に立派な大人になって、デザイナーになるという夢を叶えることを約束した。でも、その夢を私はあきらめてしまった。10年前の君を思い出す時、私の脳裏に現れるのは真っ暗なステージをゆっくりと歩く君の姿。それは、オペラ『トゥランドット』の舞台に立ったあの時の記憶。客席に座る人々の姿は、まるで真っ暗闇に並ぶのっぺらぼうのように見え、子供心にゾッとした。そんな気持ちは私から見れば不思議な感覚であり、その事実は子供心さえ忘れてしまったことを私に突きつけているようだ。

ハタチになれば自然に大人になれることを君は疑いもしなかった。でも、あと1ヶ月で20歳になるというのに、まだ私はオトナになった気が全くしない。子供の心さえ忘れてしまったというのに。だから考える。オトナとは何だろう？と。年を取った人でも大人げない人はいるし、逆に若くてもしっかりしている人はいる。大人になるのは簡単だと思っていたけど、きっと違うのだろう。苦しみや嫉妬や失望の海を漂い、弱い自分や他人をも許せるようになった時にやっと“大人”になれるのではないだろうか。私はまだ、子供と大人の間を漂い続けている。

ハタチになった私を君は早く見たいと言っていた。その夢はもうすぐ叶おうとしている。2008年1月14日の成人式の日、その日君が私に向けて書いた手紙の入ったタイムカプセルを開ける。君からの手紙を当時のクラスメートと一緒に読むのはなんだか恥ずかしい。だけど、その時だけは子供心に帰りたい。10歳の君と心の中で遊べるように。でもその前に君が私に手紙を書いたように、君に手紙を送りたい。その中で君に一つ伝えておきたいことがある。今通っている短大を卒業してからの進路について。それが銀行に勤めるということを。デザイナーとは似ても似つかない仕事にあなたは失望するだろうか？でもこれは、自分で決め、一生懸命にがんばって掴んだ道なのだとすることを君にはわかってもらいたい。君の夢を叶えることはできなかったけど、君に一つだけ約束しよう。今が一番幸せだと心から思えるような人生を送ることを。その約束を今度はちゃんと守るということ。ハタチの私から10歳の私へ。